



東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター
潮田ヒューマニティーズイニシアティブ「公募研究 A」成果報告書

研究課題(和文): 体言化の言語類型論: 性、数、類別詞および定性を中心に

研究課題(英文): Typology of nominalization: gender, number, classifier and definiteness

申請者名・所属先: 長屋尚典・人文社会系研究科

海外招聘者名: 柴谷方良・ライス大学名誉教授/神戸大学名誉教授

1. 研究の目的

諸々の要素から名詞に準じる語ならびに構文(すなわち「準体言」)を派生する体言化は、一つの事物から隣接特性によって他の要素が喚起される換喩(メトニミー)作用を認知基盤とした文法現象である。例えば、行為(run)からその行為者(runner)が、場所(New York)からそれと密接に関係する人物(New Yorker)等が導出される語彙的なものや、事態への関与者(「先場所優勝したのは白鵬だ」、事態と関連する事実(「太郎が結婚しているの」を忘れていた)などの文法的派生もある。近年、特に Shibatani (2019) の研究によって、日本語準体助詞「の」に対応する要素として、東(南)アジア、太平洋、南アメリカの諸言語に広く見られる類別詞(classifier) および西洋言語学で長く研究されてきた性(gender)・数(number)・定(definite)といった文法範疇が取り上げられている。その結果、体言化現象についての研究が大幅に拡張し、飛躍的な展開を見せている。本研究課題は、これらの進展を踏まえ、体言化がどのような文法手段によって実現されるかを類型化し、プロセスの多様性とその限界を見極めると同時に、準体言の派生と、性や類別詞などによる分類との関連性を追究し、認知論的観点から人間言語の本質の一端に迫ることを目標とする。

2. 研究開始当初の背景

申請者は、フィリピン・インドネシアで話されるオーストロネシア諸語の研究を中心に、その文法的特徴を言語類型論の観点から研究してきた。本分野で歴史的に問題になってきたのが体言化(nominalization)現象であり、Nagaya (2011) 以来、申請者も中心的研究課題として取り組んでいる。2021 年度からこの方面における研究の理論基盤の拡充と総合化ならびに成果の論文化に向けて、より本格的な研究を開始しようとしていた。

本研究の遂行にあたって、従来から申請者と研究協力者の関係にあり、言語類型論研究の世界的研究者の 1 人であるとともに、Shibatani (2018, 2019, 2020) 等一連の研究によって体言化現象の体系化・理論化について画期的な成果をあげている柴谷方良ライス大学教授を招聘し、国際的ネットワークのなかで最先端の研究を東京大学で行い、その成果を世界に発信したいと考えていた。



3. 研究の方法

本研究課題における研究方法は大きく3つある。

1. 体言化および性・数・類別詞に関する言語類型論的共同研究

現代の言語類型論においてはそれぞれの言語を専門とする研究者が一つのプロジェクトをなし、共同研究を行うことが一般的である。そこで、共同研究者（本学大学院生など）がそれぞれ専門とする言語について体言化および性・数・類別詞に関するデータを持ち寄り比較分析する。特に、

- a. ①体言化の類型化:(i)分類を行わないもの、(ii)性標示により分類を伴うもの、(iib)類別詞により分類を伴うもの、等の文法特性とその意義の考察
- b. ②性/数標示・類別詞の、数詞>指示詞>属格>用言基盤体言化、ならびに名詞句用法>修飾用法への拡散パターン発達過程の実証とその意義の考察
- c. ③これらを踏まえた体言化理論の拡充と展開を企図する。

2. 体言化ならびにその関連現象に関するコーパス・実験を利用した研究

申請者の個人研究としても体言化とその関連現象に取り組む。とりわけ、コーパス・実験を用いたデータを使用して、計量的な研究を行うことを計画している。それによって、体言化およびその関連現象に関する新しいアプローチを模索するだけでなく、もっぱら聞き取り調査のデータに頼らざるを得ない方法 1 を補完することができる。

3. 体言化に関する国際的・国内的ネットワークの構築・アウトリーチ活動

方法 1・方法 2 で述べたような研究課題を推進するために、その研究基盤としての国際的・国内的ネットワークを構築する。また、言語学を専門とする研究者や大学院生だけでなく、一般の方にも成果を広く公開する。



4. 研究成果

本研究課題における研究成果は大きく以下の 3 つにまとめることができる。体言化に関する具体的な成果は現在論文として投稿を準備している段階にこそあるものの、この申請課題で言語類型論的研究を進めた結果得られた方法論的知見や研究ネットワークを活かした研究成果は研究期間内に発表することができた。これらの研究の全ての段階において 1 年間にわたり招聘研究者である柴谷方良先生からさまざまな形で指導・助言をいただき、研究を進めることができた。

1. 体言化および性・数・類別詞に関する言語類型論的共同研究

共同研究者（本学大学院生など）がそれぞれ専門とする言語について体言化および性・数・類別詞に関するデータを持ち寄り比較分析した。特に、研究成果 3 で構築した研究ネットワークによる研究成果があった。

- a. 体言化に関する通言語的な比較研究によって多くの事実が明らかになった。フィリピン諸語のように文法的な体言化が普遍的に見られるような諸言語でも類別詞や性標示による体言化はほとんど観察されず、このような傾向はトルコ語などのチュルク諸語でも見られることが分かった。一方で、シンハラ語・ベンガル語など南アジアの諸言語においては性標示・類別詞が体言化現象で重要な役割を果たしており、理論的に重要であることがわかった。さらに、東インドネシア諸語のように類別詞こそあれその体言化における役割が限定的である言語もあり、体言化についての多様性が確認された。体言化理論によって提唱されている数詞>指示詞>属格>用言基盤体言化という階層についてはこれを支持する言語データが集まっている。
- b. 一方で、名詞句用法>修飾用法への拡散パターン発達過程についてはこれをどう証明するかという点が課題となっており、通時的視点も踏まえた通言語的比較が必要であることが判明した。また、この拡張パターンと個別言語におけるそれぞれの用法の頻度の問題をどのようにつなげるのかについても現在我々のグループ内でも議論が続いている。この点、今後の研究において解決すべき課題となった。
- c. 体言化現象においては単複標示も重要な課題の一つである。この点についての類型論的研究を深化させるために、日本語、韓国語、タガログ語などの複数標示が任意である言語やシンハラ語のような singulative がある言語の通言語コーパス研究を行った。その結果、このような言語においても単複標示を動機づけるような意味的な区別が存在するかどうかに関する仮説を提示できそうである。

2. 体言化ならびにその関連現象に関するコーパス・実験を利用した研究

申請者の個人研究としても体言化とその関連現象についてコーパス・実験を用いたデータを使用して研究を行った。

- a. 東インドネシアのオーストロネシア語族の言語について記述的な研究を行った。まず、フローレス島を中心とした東インドネシア諸語の類型についての論文の最終版をまとめた。ここでも体言化の視点が重要な役割を果たすことに触れた (Nagaya to appear a)。さらに、ラマホロット語の空間表現について記述分析をした論文を発表し、この言語で「山」や「海」などによる空間参照が行われやすい理由の一つとして体言化を指摘した (Nagaya 2022b)。



- b. 体言化接辞を起源とするタガログ語のヴォイス体系についてコーパスを利用した研究を推進した。特に、受者体言化を起源とする場所ヴォイスの使用について分析を行い、その成果を 2022 年 12 月の国際学会で発表する予定である（長屋 2022, Nagaya 2022c）。
 - c. 体言化研究についての重要な研究である『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』についての書評論文をまとめ発表した（Nagaya 2022e）。
 - d. このような体言化に関するコーパス・実験を利用した研究の観点を活かし、移動表現に関する言語類型論的研究も行った。移動表現は体言化と直接に関係していない場合が多いものの、体言化研究のために構築した研究基盤をそのまま利用する形でおこなったものであり、広い意味でこのプロジェクトの成果と言える。
3. 体言化に関する国際的・国内的な研究ネットワークの構築・アウトリーチ活動
- a. 体言化についての研究を推進するために、まずは 2021 年度 A セメスターにおいて「言語類型論の発展」と題して体言化に関する発展的な内容を扱う授業を開講し、本学における研究基盤を整備した。さらに、2022 年度 S セメスターにおいては公開でセミナー形式の研究会を開催し、国内外からの研究者の参加があった。これらの機会では招聘研究者である柴谷先生の講義も行われ、活発な議論と研究の進展があった。この点、特に大きな成果をあげたのは南アジアの言語における体言化理論の研究であり、今回の柴谷先生の講義や研究指導を通して学んだことを活かし、大学院生の吉田樹生さん（東京大学）、石川さくらさん（東京外国語大学）が大きな研究成果をあげた。
 - b. 招聘研究者である柴谷方良先生の講演会を申請者が運営するコロキウム UTokyo Linguistics Colloquium (<https://sites.google.com/site/naonorinagaya/utokyo-linguistics-colloquium>) において 2021 年 11 月 26 日に開催した。「現代言語類型論 60 年—成果と課題—」と題したこの講演会には約 200 名近い参加者があった。
 - c. 本研究課題に関連するアウトリーチ活動として、2021 年 12 月と 2022 年 7 月に HMC オープンセミナーを行い、さらに、2022 年 5 月には東京大学第 95 回五月祭にて一般向け講演会を行った。どの講演会も盛況であり、本研究課題の成果を一般向けに報告することができた。



5. 主な発表論文等

〔図書〕

Book chapters:

- Nagaya, Naonori. To appear a. Languages of Flores and its satellites. Alexander Adelaar and Antoinette Schapper (eds.) *The Oxford Guide to the Malayo-Polynesian Languages of Southeast Asia*. Oxford: Oxford University Press.
- Nagaya, Naonori. To appear b. Discourse particles in Tagalog: The case of *e*. Elin McCready and Hiroki Nomoto (eds.) *Discourse Particles in Asian Languages*. London: Routledge.
- Nagaya, Naonori. To appear c. Motion event descriptions in Tagalog. Yo Matsumoto (ed.) *Motion Event Descriptions from a Crosslinguistic Perspective, Volume 1: Case Studies*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Yo Matsumoto, Kimi Akita, Anna Bordilovskaya, Kiyoko Eguchi, Hiroaki Koga, Miho Mano, Ikuko Matsuse, Takahiro Morita, Naonori Nagaya, Kiyoko Takahashi, Ryosuke Takahashi, and Yuko Yoshinari. 2022. Linguistic representations of visual motion: A crosslinguistic experimental study. In Laure Sarda & Benjamin Fagard (eds.), *Neglected Aspects of Motion-Event Description: Deixis, Asymmetries, Constructions*, 43-67. Amsterdam: John Benjamins. <https://doi.org/10.1075/hcp.72.03mat>.

〔雑誌論文〕

- Nagaya, Naonori. 2022a. Beyond questions: Non-interrogative uses of *ano* 'what' in Tagalog. *Journal of Pragmatics* 190. 91-109. <https://doi.org/10.1016/j.pragma.2022.01.007>.
- Nagaya, Naonori. 2022b. Directionals, topography, and cultural construals of landscape in Lamaholot. *Linguistics Vanguard* 8(s1). 25-37. <https://doi.org/10.1515/lingvan-2020-0022>.

〔学会発表〕

- Nagaya, Naonori. 2022c. Ditransitive alternations in the Tagalog symmetrical voice system. The 14th conference of the Association for Linguistic Typology, University of Texas at Austin, USA, December 15-17, 2022.
- Matsumoto, Yo, Badema, Anna Bordilovskaya, Kiyoko Eguchi, Miho Mano, Naonori Nagaya, and Kyosuke Yamamoto. 2022. Types of caused motion events and the patterns of their linguistic representations. The 14th conference of the Association for Linguistic Typology, University of Texas at Austin, USA, December 15-17, 2022.
- 長屋尚典. 2022. 英語と世界の言語の与格交替. 日本英語学会第 40 回大会特別シンポジウム「英語の常識・世界の言語の非常識: 英語学の知見が個別言語の研究に与える正の影響と負の影響」, オンライン, 2022 年 11 月 5 日.
- Nagaya, Naonori, Mai Hayashi, Yuko Morokuma, Yui Suzuki, Shun Takahashi, and Mizuki Tanigawa. 2022. Towards an experiment-based semantic map of paths. *Neglected Aspects of Motion-Event Description 2022*. Kyoto University, Kyoto, November 3-4, 2022.
- 谷川みずき, 長屋尚典. 2022. ノルウェー語で *komme* 「来る」はいつ使われるのか: ビデオ実験による分析. 日本言語学会第 164 回大会, オンライン, 2022 年 6 月 18 日.



Nagaya, Naonori, Mai Hayashi. 2022. The dynamics of *sana all* in online interactions. The 4th LSP International Conference (LSPIC 2022) and the 21st English in Southeast Asia International Conference (21ESEA), online, March 10–12, 2022.

長屋尚典, 鈴木唯, 谷川みずき, 林真衣, 諸隈夕子. 2022. 移動表現における多重表示の冗長性と類型論. *Prosody & Grammar Festa 6*, 国立国語研究所, オンライン, 2022年1月30日.

〔その他〕

Book review:

Nagaya, Naonori. 2022e. Pardeshi, Prashant and Kaoru Horie: *Nihongo to Sekai no Gengo no Meisi-syuusyoku-hyogen*. *Journal of Japanese Linguistics* 38(2). 279–281. <https://doi.org/10.1515/jjl-2022-2061>.

講演会:

長屋尚典. 2022. はじめての危機言語. 第73回 HMC オープンセミナー, 東京大学ヒューマニティーズセンター, 東京, 2022年7月22日.

長屋尚典. 2022. 空間と言語: ことばの多様性入門. 第95回 五月祭. 東京大学, 東京, 2022年5月15日.

長屋尚典. 2021. 「右」も「左」もない言語と言語類型論. 第49回 HMC オープンセミナー, 東京大学ヒューマニティーズセンター, オンライン, 2021年12月17日.

共同研究者 (大学院生) の関連する研究成果:

Hayashi, Mai. 2022. Word order variation and change in Tagalog noun phrases. The 7th meeting of the New Ways of Analyzing Variation – Asia Pacific (NWAV-AP 7), Chulalongkorn University, Bangkok, December 14–16, 2022.

鈴木唯. 2022. トルコ語の項体言化と文法関係. 日本言語学会第165回大会, オンライン, 2022年11月12–13日.

吉田樹生・石川さくら. 2022. 体言化理論における文法関係と概念表示: インド・アリア諸語の用言基盤体言化から. 日本言語学会第165回大会, オンライン, 2022年11月12–13日.

Ishikawa, Sakura & Shigeki Yoshida. 2022. The NP- and modification-use of verbal-based argument nominalizations in Bengali and Nepali. The first meeting of the “Empirical Study of the Typology of Nominalization” project, The University of Tokyo, Hongo, September 23, 2022.

Yoshida, Shigeki. 2022. Classifying nominalizations in Sinhala. The NINJAL meeting on nominalizations, The University of Tokyo, Hongo, May 21, 2022.



6. 招聘フェロー(海外招聘者)からのコメント

Houston, Texas, USA

November 9, 2022

My recent tenure as a visiting fellow at the Humanities Center of the University of Tokyo was one of the most rewarding opportunities in my career as a professional linguist. Thanks to the generous support of the Ushioda Humanities Initiative, Dr. Naonori Nagaya, my host scientist, and I were able to engage in several research activities including public lectures, graduate seminars, joint workshops with a research project of the National Institute of the Japanese Language and Linguistics (国立国語研究所), and fieldwork on the dialects of Kyūshū, Chūgoku, and Shikoku. These activities were all centered on the question of the typology of nominalization in the Asian context, as detailed in the proposal by the host scientist. In particular, we focused on east, south-east, and south Asian languages including Japanese, Zauzou (Loloish language in China), Vietnamese, Thai, Indo-Aryan languages Assamese, Bengali, Marathi, and Sinhala, as well as the Dravidian language Kannada. A comparative study of these languages allowed us to draw a hypothesis on gender/classifier-based nominalizations in terms of the hierarchy “NUM > DEM > GEN > ADJ > V-based nominalizations”, which states that numerals are the first to be nominalized by gender/classifier marking, followed by demonstratives, genitives, adjectives, and verbal-based nominalizations. While understanding the nature (e.g., the cognitive underpinnings) of the hierarchy requires more time, the hypothesis makes a giant step toward constraining the synchronic distribution patterns and predicting future change in gender-/classifier-marked nominalizations.

Respectfully submitted,

Masayoshi Shibatani

Deedee McMurtry Professor Emeritus of Linguistics, Rice University

Professor Emeritus, Kobe University